
おひさまsummer

詩代 歩溜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おひさまsummer

【コード】

N5909Z

【作者名】

詩代 歩溜

【あらすじ】

13回目の夏をむかえようとしていた千歳。いろいろあって、孤独だと感じるが多くなっていたある日のこと。

「ぴーなっつ」

わけのわからない声が聞こえて・・・

プロローグ（前書き）

大切な人と過ごす夏。

1秒でもいいから一緒にいたいんだ。

1秒じゃたりないんだけどね。

ブローグ

太陽出てるね。

今日は雨のはずなのに。

天気予報土さん残念。

でも私は嬉しいな。

昨日は「明日は雨なんだ。」ってすごいがっかりだったのに。

今、晴れててこんなに嬉しいのって天気予報を外してくれたおかげじゃないかな。

最初から晴れって分かってたらこんなに嬉しくなかったはず……。

天気予報ありがとーう！

まあ、でも、晴れだからって何かあるわけじゃないんだけどね。

お空の上で喜んでるあなたを想って私が勝手に喜んでるだけだよ。

きつと今日はいい日だよ！

ニユースの占いでは最悪だったけどね。

l o s t f a t h e r

「いつてきます。」

その言葉に対しての返事はない。前までは、「いつてらっしゃい。」の声が聞こえないと部屋中捜しまわって家族を見つけて、無理矢理言わせてた。けど今はそんなことしたって時間の無駄。だって誰もいないもん。いつからだろう？お母さんが帰ってこなくなっちゃったの。最初は寂しかった。去年・・・だから、中1までお母さんと一緒に寝てた私が、今はベッドに一人どころか家の中に一人だよ。不安で仕方なかった。ま、それも最初だけ。今は慣れっこさ。そうか、あれは12ヶ月前のこと。

- - -

「お母さん！私、13歳になった記念に一人で寝る！」

私は自信満々に言った。それもドヤ顔で。でもお母さんは、

「そう、これで広々寝れるね。」

と、このひとことしか言わなかった。この時は何とも思わなかったんだ。

3ヶ月後・・・

お父さんが、仕事から帰ってくるなりこう言った。

「転勤が決まった。だから・・・離婚してくれ。」

その時20時で私とお母さんは夕飯を食べていた。お父さんの分もちゃんとあった。

「本気？なんの冗談？今日はエイプリルフルとちやいますよ。」

茶化すように私が言ったらなぜか怒られた。え？え？なんで私怒られたのかな？

「・・・分かった。」

はい？分かった？all right？イヤイヤ、私全然分からない。お母さんは何が分かったの？離婚だよ？離れ離れだよ？訳が分からないよ・・・。

「お母さん！お父さん！なんなの？説明してください。」

私が説明するよう催促すると、お母さんがクリップでつままれたように開きずらそうな唇を開けて説明してくれた。

「あのね、お父さんはね、私たち以外に大切な人がいるんだって。だから、私達は離れなきゃいけないの。一緒にいちゃいけないの。ずっと黙っててごめんね。千歳ちとせはお母さんとずっと一緒にいようね。」

え・・・？私はいまだに状況が理解できない。けど、お母さんは泣いている。もう、それだけでただ事じゃないことが分かった。

「お母さん、泣かないで！お父さん！私たち以外に大切な人がいるってどういこと？」

お父さんは真顔で答えた。

「お父さん、好きな人がいるんだ。でも、お父さんにはお母さんや千歳がいるから・・・。今まで何もなかった。けど、お父さん、福岡に転勤が決まったんだ。それで、その人に、「一緒に住もう。」って言われて。お父さん断れなかった。だから、こんな中途半端はいけないと思って、こうすることに決めたんだ。」

お父さんの言葉を聞いて、なぜか悲しいとか、寂しいとか感じなかった。感じたのは怒りだけ。

「私、13年生きてて、幸せじゃないって感じたことなかった。でも今日初めて感じた。ああ、私、不幸だな。って。こんな父親持ったこと。ううん。そうじゃない。ずっと不安でいっぱいだったお母さんの気持ちに気付けなかったことだよ！この上ない親不孝者になっちゃったんだよ、私。仕方ないよね、お母さんを幸せにできなかった者同士一緒にいたってさ。丁度良かったんだよ。離れることになつて。でも、一緒にしないでよね。お父さんは最後までお母さんを幸せにできなかったけど、私はこれからお母さんを幸せにしてみせるんだから！」

そう言い放った私の目にはもう涙が溢れてたことは言うまでもないよね。私が怒りを感じた相手って、こんな最低なお父さんにじゃなく、自分自身だったんだね。

お父さんのために用意してあった夕飯が食べられることなく冷たくなって、テーブルの上で佇んでた。

数日後

お父さんは家を出て行った。お金のことはちゃんとするみたい。私にはよく分からなかったけど。

その日も、お父さんがいなくなったこと以外は何も変わらないこの家で、私はお母さんと夕飯を食べた。私の好きな牛丼だった。紅シヨウガたつぷりの。私はいつもなら、夕飯の時に、その日あった出来事を話したい放題話していた。お母さんはちゃんと聞いてくれるの。でもね、その日は何も話せなかった。お父さんのこと以外の話題がなかったんだ。沈黙が続く。お母さんだから、沈黙しても別に気まずくはないんだけど、なんか落ち付かなくて牛丼の味が分からなかった。そんな時、お母さんが何か思い出したように話した。

「お父さんがさ、離婚の話を出した時、千歳がお父さんになんか話してたよね。あれね、お母さんすごく

嬉しかった。でもね、千歳はひとつだけ間違えてたよ。「お父さんは最後までお母さんを幸せにできなかった。」って言ったでしょ。

あれね、違うよ。」

「え……?」

「お父さんだつてひとつだけかけがえのないものくれたよ。」

「……?」

「千歳だよ。お父さんは千歳をくれたんだよ。ほら、ひとつ幸せくれたよね。」

涙目で話すお母さんの顔を見て、私は大泣きした。さっきまで味のなかった牛丼が、いきなり塩味になった。そんな私を見て、おかあ

さんはやさしく笑ってた。

-
-
-
-

びーなっつの出会い

もう7月。あと2週間で誕生日が来る。去年まで、「たんじょうび」と聞けば、

(プレゼントはなにもらおう?)

それしか考えてなかった。たった1年しか経ってないのに、1年前の自分がひどく幼く感じる。いや、大人ぶってるわけじゃないんだよ?でもさ、今年は誕生日どころじゃないんだよね。早くお母さんを見つけないきゃ。このままじゃLonely Birthdayになっちゃうよ。

キンコーンカンコーン

鐘が鳴った。よし、お弁当だ。今日も屋上でランチタイム。屋上とかベタなスポットなのに案外誰も使わないんだよね。あ、みんな教室で食べるもんね。普通は。まあ、いいや。お昼食べよーっと。

風が気持ちいい。空はこんなに晴々としてるのに、私だけ何でこんなにモヤモヤしなきゃいけないの?ほら、さつき教室にいたクラスメイトだってみんな、何も考えないで、ただ平凡に暮らしてるんだよ。この世に神なんて存在しないんだ。平等なんてありえない。

私は卑屈。妬みつぼくて僻みつばい。相手に悪く思われたくないから誰にも愚痴など言ったことがない。だけどそれは、“いい子”なんかじゃなくていい子ぶってるだけなんだ。家でも外でも。

こうして屋上に来るといつもこう思う。

「なんで私だけ?」って。

私以外の人もみんなモヤモヤすりゃいいんだ。って……。モヤモヤの原因は大体分かってる。けど、その原因無くそうってする気持ちはないわけじゃないのに、怖くてさ。できないの。

私って可愛そうなのかな……。

もってきたお弁当箱を開きもせず、青い空を眺めてただぼーっとしてたら、なにか幻聴のようなものが聞こえる。

「……つつ？」

なんか男の子のような声。低くて。耳をふさいでも聞こえるの。体の底から響いて聞こえてくるの。重低音って言うのかな？なんか眠くなってきた。

「ぴーなつつ。だってば！」

今度こそはつきり聞こえた。後ろだ。

振り向くとそこには男の子が立っていた。

「な……に……？」

あれれ？なんで私ビビってんの？男子苦手だから？いや、そんなことじゃないな。あ、苦手だけでも。

「やっと気付いた？オレ、9ヶ月も一緒にいたのにな。」

はひ？9ヶ月？

「それって……。」

「なに？」

「ストーカー……？ひいひい〜？！」

あるうことか私は取り乱してしまった。

「オレがストーカー？違うよ。ストーカーってあれだろ？あとついで、電柱柱の陰びしびしからこっそり観察して、家まで着いて行って、そんなもって盗撮とかしちゃうやつだろ？」

「そうだね。詳しいんだね。」

冷めた目で見てやった。

「だからちげえって。話を聞けい！」

とりあえず私はその、“ぴーなつつ男”の話話を聞くことにした。

ぴーなつつのわけ

ぴーなつつ男が話し始める。

「ちゃんと聞けよ？めんどくせえから1回しか言わねえぞ？あのな、9ヶ月前って言ったらさ。率直に言っけどおまえの父ちゃんが出てった時期だろ？そう、その時くらいからオレはおまえの傍で暮らすことになったんだ。もちろん見えなかつただろうな。今までは。それはおまえの孤独な気持ちが小さかつたからだ。でも今、オレがこんなにハッキリ見えるってことは・・・。おまえは相当孤独なんだよ。」

苦笑いで話すぴーなつつ男。なぜだか無性にイラついた。

「私孤独じゃないよ！なにそれ！全然孤独じゃない！」

全力否定してやった。何よこの男は。初対面の人に、孤独だ、孤独だって。失礼じゃない。

「だから初対面じゃねえーんだって。」

はい？

「何勝手に人の心読んで！個人情報保護法を無視する気?!」

誰かと話すのなんて久しぶりだった。だからなぜか私のテンションはおかしかった。

「おまえのどの辺が孤独じゃないって？」

人の質問は無視かい……。

「どの辺って……。じゃ、じゃあ、逆に私のどの辺が孤独なの？」

「んー？何個言えばいいんだ？とりあえずまあ、強いて言うなら……。自分の思ってることちゃんと伝えられない？ってか伝えられる相手がいないとこかな。」

腕組みしながら、すました顔でいうぴーなっつ男。むかつくけど、まあ、言ってることは正しいかもしれない。私、思ったことどころか、会話出来る相手すらいもないもん。

あれ？なんでかなあ。この人には私、普通にものを言うことできる気がする。さつきもちゃんと、

「自分は孤独じゃない。」

って伝えられた。結果それは間違いだっけ気付かされちゃったけど……。なんか途端にこのぴーなっつ男に心開けてきた気がした。

「オレに言いたいこと言えるのはな、オレとおまえはぴーなっつだからだ。」

「はあ？」

ごめん。前言撤回だ。心開けた？こんな変人に？ないない。

なにがぴーなっつ？ってかどんだけぴーなっつ好きなの？この男は。

「やっぱ変な顔したな。ははっ。今、意味分かんない奴だっけ思っ

ただろ？当然だけどな。」

「……。」

「ぴーなっつってさ、どんな状態だ？」

「え……？どんな状態って？えっと、一つの実に、二つタネが入って……。」

「そうそう。そのタネがオレとおまえ。」

「はあい？」

「オレがおまえの傍にいることはおまえが生まれた時から決まっていた。驚いた？」

「おお……おふうう……。驚いた。」

「いまだに理解できてない……。生まれた時から決まっていた？ええっ？！」

「え、でもさ、私の傍に来たのは9ヶ月前なんでしょ？おかしいじゃない。」

「ああ、傍に来たのはな。でもそれより前からおまえのことは知っていた。」

よく分かんないなあ。なんで9ヶ月前なの？お父さんのことが関係あるって言ってたけど……。

「それはおまえが寂しがつてたからだ。んー、孤独つてやつかな。」
またそれか。孤独か。ってか人の心をまた読んだのか……。まあいいや。

「私が孤独だからアンタは私の傍に来たの？」

「そうそう。あとさ、オレ、ぴーなっつ男じゃない。」

しまった。この男は心が読めるんだった。

「じゃあなんていうの？」

「太陽……だよ。」

小さい声で、この目の前にいる太陽は言った。

「太陽か。ふふ。温かそうだね。」

私がそう言つと、

「あれ？笑わないの？」

すごく不思議そうな顔して聞いてきた。

「え、なんで笑うの？」

ああ、私も質問返ししちゃった。

「うん。まあいいや。今度話すよ。それじゃ、教室戻れ。」

「うん。」

なりゆきにまかせて

太陽と衝撃的な出会いをして、まだ、現実なのか夢なのかよく分かってない。5時間目は体育。着替えなきや。そう思ってた教室に入ると誰もいない。あれ？時計時計。・・・ん？

いやああああー！ー！？

時計の針達は1時40分をさしていた。授業開始から10分も経っている。いままでベル席（授業開始のチャイムが鳴り終わってから席につくこと。）なんてしたことない模範的生徒だったのに・・・。よし、こうなったら仮病だ。保健室へGO。

保健室は私の教室、2年2組の教室を出て、30段階を降りて、反対側の校舎の1階。あちゃ、渡り廊下を渡るんだ。あそこは校庭からよく見える。ダメじゃん・・・。体育の教科担任、吉川先生はなんかすごく怖い。このまえなんて、授業中ふざける男子に柔道の・・・なんちゃらって技かけてたし。痛そうだった。

ベル席なんてしたらよくあるあの、校庭何周とかいう罰をつけるに違いない。それだけは免れたい。じゃあどうするか・・・。

「なあ。」

太陽？なんでここにいんの？

「ここにいちやダメじゃん！見つかったらやばいよ?!」

「え、なんで？今日は転校手続きをしに来ただけだ。まあ、ホント言っと入学手続きなんだけどな。」

「なんで？太陽が？この学校に？入るの？なんで！？」

「おまえが寂しくなくなるまで傍にいるんだから、学校だつて一緒に行くんだよ。今までだつておまえと一緒に授業受けてたんだぜ？おまえが気付いてないだけで。」

え??？一緒に？

「じゃあテストの時とか回答見てたつてこと?!」

「当たり前じゃん。」

ぬわーんですと???

「勝手に見ないでよ!」

「別によくね？平均点よりちょっと下つてだけじゃん。」

それがいけないんだつて……。それにあのときは平均点がかなり下がつてた時だしね。それで平均点以下つて……。人に再び面を向かうべからず、だわよ。

それに、太陽つて喋んなきゃ、まあ、顔はいいと思うし、背も高いし。髪の毛サラサラだから、学校なんて来たら「彼氏ほしい」つて言うのが日常茶飯事になっちゃってるうちのクラスの女子の格好の餌食じゃん！

いや、今そんなこと考えてる暇はない。

「早く行かなきゃ!」

「それならオレにいい考えがある。」

「なにさ。」

「簡単なことだよ。オレの横を普通に歩いときゃ、おまえはちっちゃいんだから校庭から見えないだろ?」

あ、そつか。そんな簡単な事か。って

「人の子とさらっとチビ呼ばわりしてんじゃないわよ!」

「155cmで、よんじゅ……ぶっつ」

「なんで、なんで、なんで体重まで知ってんの?!変態?」

「は?よんじゅうまでしか言っただろ?!」

「なんだ知らないのか。ほっ。」

「保健室いくんだろ?ほれ。」

太陽がいきなり私の腕を引っ張った。

あっという間に渡り廊下に着いた。

「普通に歩けよ?」

「う……ん。」

うわあ。なんか緊張してきたよ。ばれないと思うけど……。あれ、渡辺君見てる？気のせいか……。なんか長くない？こんな長かつたけ？この廊下。ん？なんか顔が熱くなってきた……。心臓がドキドキというかフィーバーしてる。。。

「着いたぞ？そこだろ。保健室。行ってこいよ。」

「あ、着いた？太陽、ありがと。」

私が軽くお礼を言うと太陽は微笑んでた。気持ち悪いな。

なんだアイツ。

「失礼します。」

「あら、福井^{ふくい}さん。あ、ごめんなさい。ホントに。」

「いや、全然……。」

両親が離婚して、私の苗字は福井から夢咲^{ゆめさき}になった。

「あの、夢咲^{ゆめさき}さん。どうしたの？」

「頭が痛くて……。」

うそうそ。ちょっと顔が熱いだけ。

「ホントね。顔がちょっと赤い。熱測ってみて？」

そういつて、保健の先生、はなその花園先生は、体温計をくれた。

・・・。

「ピピッ」

37・0

ミラコーだ！ミラコーが起こった。あら、神様っているんじゃない？

「どれ。あら、37か。どうする？帰る？もつ少し様子みる？」

即答で。

「帰ります・・・。」

「じゃあ、荷物持ってくるね。」

「あ、自分で行くので平気です。」

「あ、だいじょぶ？じゃあ電話しなきゃ！夢咲さん、お家の番号は
「？」

「家、誰もいないので、歩いて帰ります。」

「平気なの？私が運転できればなあ。気をつけてね。」

「はい。ありがとうございました。失礼します。」

早退届けだけ持って私は保健室を出た。

あら、太陽君。ずっとそこにいたのね。

「うん。あ、どうだった？」

え？この方、心読めるんじゃないの？

「なんか、読める範囲があるらしい。」

「読める範囲？」

「ああ、壁一枚はさむと読めない。多分表情で判断してるからだ。」

「表情？」

そうか。表情か。じゃあ、

（アイス食べたい。）

そう思って、とびつきり変な顔をして太陽を見た。

・・・。

なに？この沈黙・・・。もしかしてスベツた？恥。

「・・・ぶふつ。「アイス食いたい。」だろ？」

「なんで？何でわかったの？」

「え、顔に書いてあった。」

はひ？あんな顔に？どの辺に？理解不能だ。

「熱が、ちよつとだけあつた。」

「大丈夫なのかつて・・・当り前か。」

「ふふつ。あ、荷物持つてこなきゃ。」

私と太陽は行きと同じ方法で渡り廊下を渡つて教室にたどり着いた。
後ろの方の扉を開けた。

！！！！

渡辺君？！え？なんでいんの？

「あ、夢咲さん。そちらは・・・？」

なんか言ってる。え？私？何で私に聞いたの？私はあなたと喋りたくないんだけども。

「あ、オレは・・・太陽。明日からクラスメイトだよ。よろしくな。」

にっこりして太陽が言つと、

「にっこちこそ。」

つて渡辺君も笑つた。

「じゃあな。」

私達が教室を出てくと、渡辺君が手を振っていた。

なんだ……。渡辺君っていい人じゃん。なのに私、勉強以外に興味なさそうだからって勝手に嫌なイメージ持って……。最悪じゃん。私以上にブラックハートな人っているのかな？

「まあ、第一印象でイメージよくないのは仕方ないとして、話そうともしないで悪いイメージ持つのはよくないはな。」

「そうだよね。気をつけなきゃ。」

今度渡辺君と話してみようかな。

「あれ、太陽も帰るの？」

「当たり前じゃん。」

「どこに？」

「は？おまえと一緒にどこだよ。」

「はあ？？」

私達は校門を出た。

そこにあるもの

.....

あれ。ここは私の家ですよね？なんで私の居心地が悪いのかな？

それは・・・

「オレがいるから、だろ？」

「分かってんならなんで入ったんだよ？大体今日初めて会った人をうちに入れるなんて・・・。」

「だから初めてじゃねえって・・・。」

「私にとっては初めてなの！」

「変な感じだな。オレは半年以上一緒にいるのにな。」

「知らないよ。。。でも、いや、やっぱなんでもない。」

「初めて会う割にはよく話せるのが不思議・・・だろ？」

「分かってんならいちいち声に出すな！なんか恥ずかしいじゃん。あ、そうだ。さっきさ、授業も一緒にうけてたって言ったでしょ。でもなんでクラスのみんなにバレなかったの？」

「え、おまえがオレを見れなかったように、おまえがオレのこと見えるようになるまでは他の奴にも見えないんだよ。」

「そういうもんか。聞きたいことたくさんあるんだけど……。全部聞いてもいい？」

「ん。別にいいけど。」

「じゃあさ、私が生まれた時から太陽が私の傍にいることは決まっていたって、あれはどういうこと？」

「ああ。人つてさ、絶対魂を持つてんだろ？でもオレみたいな奴らは単体の魂じゃ、体に入る事も何かを考えることもできない。つまり、ホントの人間の魂と同盟を結ばなきゃ生きれないってことだ。その同盟の名前がさつき言ってた「ぴーなつつ」だよ。それは代々継がれてきた名前らしい。オレはおまえに呼ばれた。その時から同盟は成立する。そんだけの話だよ。」

「そんだけ？やばい。まったく分かんない。「ぴーなつつ」のくだりまでは分かった。けど、私が太陽を呼んだ？なにそれ？」

「魂が呼ぶんだよ。んー。逆に言うと、オレらは人間の叫びを聞く」と引き付けられるっていうか……。あ、でもすげえんだぞ？同盟結ぶって。大抵は結ぼうとすると「なんか違う。」ってなって結べないことが多い。それほど強い叫びじゃないと結べない。じゃなきゃ、オレみたいにならずと一緒にいる。なんて軽々しく言えねえもん。」

「そういうもんかあ。同盟ね。貿易みたいだね。私と太陽はなんで結べたのかね？なぞだ……。」

「それはオレにもわかんねえ。けど今オレに入ってきてる情報では

同盟を結べたのはオレとおまえと、あともう1組だけらしい。すげえな。」

すげえっ。だって世界中で人間って約70億人でしょ？70億分の2ってやばい！世界規模で抽選2名様のカンペーンやったとして、私ともう一人誰かが当たったってことでしょ？うわぁー！私今まで何応募しても当たったためしがないのに。

お父さんはよく当ててたな。お父さん、今何してんのかな。元気がな。最初のうちはやっぱりお母さんの心を傷つけたお父さんが許せなかった。けど時間がたつにつれてお父さんとの思い出が蘇ってきてちゃってさ……。あれ。おかしいな。目から涙が……。鼻から鼻水が……。

「おまえさ、泣きたいときにどうして我慢すんの？泣きゃいいじゃん。」

「……だつて。泣いたっておかあさんもおとうさんも帰ってくるわけじゃない……。」

「泣いたら帰ってくるなら泣くのか。じゃあ一生帰ってこなかったら？一生泣かねえの？無理だろ？そんなこと。人間なんだから泣け。無理して笑うな。」

「うん。ううあああー……！！」

このあとどんくらい泣いたんだろう？太陽の服鼻水と涙でびちゃびちゃだった。ごめん。

いっぱい泣いたらすすきりした。けど、目が膨張した気がする。

この後も太陽に色々質問した。

- 私のところに来る前はどこにいてなにをしてたの？ -

- 寝てたんだよ。空の上で。おまえに呼ばれたから行ったら、大きくなってて驚いた。 -

- 太陽はどうやって生まれたの？なんで男なの？ -

- それだけはオレにも分かんねえや。 -

- 太陽は言葉とかどうやって覚えたの？ -

- 目が覚めた時にはなぜかもう理解できてた。 -

最後にもう一つだけ・・・

「どうして太陽って名前なの？」

「どうしても話さなきゃダメか？」

「うん。だめ。」

「なんか。目が覚めて、おまえのどこに行く前、不思議なじいさんに会って、あの子のそこへ行くなら名前がなきゃ不便だろうって、その、なんか、おまえにとって太陽みたいに温かい存在になれって。言われて・・・。だあ！なんだこれ。」

激しく照れる太陽が可愛く見えた。

「そんな由来があったのか。なんで、」

「え？」

「少しも恥ずかしがることないじゃん。そんな由来なら嬉しい。」

素直に私は嬉しいと思った。

私は太陽の姿を今日初めてみたけど、やっぱりどこか初対面のような気がしないのは、私達が

「ぴーなっつ」だからなんだね。

ピルルルルルルツ・・・

あ、電話。はい？知らないなあ。無視しようかな。

「出る！」

え？

「はい、夢咲です。え・・・？？」

電話は病院からだった。

過去の涙にさよなら

午後4時だった。家に電話が来た。病院からだった。お母さんが病院に運ばれたらしい。8ヶ月前に家を出て行ったお母さん。出て行った理由は私にも正確にはわからない。けど、明らかに元気がなかったのは分かった。お父さんが出て行ったあの日の夕飯、一緒に牛丼を食べて以来お母さんとは一緒に食事をしてない。次第にお母さんはあまり家に帰ってこなくなった。私が学校に帰ってくると、たまにお母さんがいる。

「――」

「ただいま……。あ、お母さん。帰ってたの。今日のご飯は？」

「うるさい。」

「ごめん。じゃ、あとで私がつっておくね。お母さんのす……」

「うるさいっつってんじゃん！お母さんの分はいらないから！」

「そう。」

お母さんは寝室へ行った。今は6時半。まだ寝るはずないよね。

「いただきます。」

テーブルの周りには3つイスがある。使われてるのは1つだけ。お父さんが出て行ってから2週間経つのにいまだにお父さんの歯ブラシ、コップ、箸などは残っている。捨てればいいのに。

私は年相応に料理はできる方だけど、あんまり美味しくできないんだよね。なんでかな。

あ、明日資源回収だ。お父さんのもの出しとこつ。

翌日

ゴミを出した。

今日は月曜日だから部活がない。早く帰ってこれた。

あれ？

開いてる。お母さんいるのかな。

「ただいま。」

「千歳？ちよつと・・・」

お母さんに呼ばれた。なんだろう？

え？荒らされた部屋。お母さんの、今まで一度もみたことが無いような怖い顔。あれ、私、朝、鍵かけたよな？空き巣はないと思うんだけど・・・。

「お母さん何？」

「お父さんのもの捨てたの千歳・・・？」

「え、そつだよ。いつまでも持つてても仕方ないかなつて……。」
一瞬間が空いた。

「つ・つぎけんなよ!？なんであんたはそつやつて勝手なことばつかするんだよ!！」

な、なにになに?お母さん何?え、苦しい……。やめてよ。

どかつ

あ……。

「お母さんごめんね?」

勢い余つてお母さんのこと蹴つちやつた。

「あんたはホントに親不孝もんだねえ。はははつ。親の顔が見てみたいねえ!!それは私だよつ!!」

お母さん?もうこの人はお母さんじゃない気がする。

- - -

この出来事があつてから2週間後くらい経つてから、朝起きるとお母さんの姿がなかつた。朝いないことはたまにあつたから別に驚かなかつたけど、その次の日も、その次の日も、お母さんは一度も帰つてこなかつた。

「千歳はお母さんとずっと一緒にいようね。」

あの言葉。信じてたのにな。

やだやだ。また涙が。

今は電車の中。太陽と2人で総合病院まで行くの。お母さん危険な状態らしい。

薬物だつて。この前学校で習った。私は絶対嫌だと思った。怖いもん。なのにそれをお母さんがしてたなんて。信じられない。

着いた。

「あの、夢咲です。」

受付の看護師さんに声をかけた。

「あ、夢咲さんですか。あちらへ。」

私達は、指のさされた方へただひたすら進んだ。お母さんのいる場所はずぐに分かった。けど、なんか途端に怖くなってきた。でも、入らなきゃ。

「お母さん・・・?」

これがお母さん?誰かと思った・・・。

お母さんはこんなに痩せてない。

お母さんはこんな顔悪くない。

お母さんはもつときれいな髪の毛だった。

お母さんはもつと・・・優しそうだった。

なんで？なんで？お母さん？起きないし・・・。

「お母さん？お母さん！」

いくら呼んだって1mmも瞼は動かない。

「今日は、もう帰ろう。な？また元気になったら来ような。」

太陽が私の背中を押す。私は従うしかなかった。

ダメだ。今、口きいたら絶対涙が・・・。あ、そつだ我慢しなくていいんだ。

「太陽。お母さん平気かな。死んじったりしないよね？」

やっぱ出て来た。もう止められないや。

「ああ。信じてる。」

「え？」

「お母さんは死なないって信じてる。そつすりゃ大丈夫だ。」

「うん。そつする。」

根拠はないけど、そう信じることにした。今私は泣いている。それに笑っている。

もう過去のことと泣くのはやめよう。私は未来、これから先に繋ぐために泣こう。

お母さんが無事であることを信じて・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5909z/>

おひさまsummer

2011年12月25日00時47分発行